

令和5年度

飛騨市少年の主張大会

～ 発表記録集 ～



主催 飛騨市青少年育成市民会議

共催 飛騨市 飛騨市教育委員会

もくじ

【中学生部門】

地域の伝統行事を通して考えたこと	古川 三年	石原 綾心	いしはら あやみ	1
良い町づくりのためには	神岡 三年	大西 結心	おおにし ゆい	3
「続ける先に」	山之村 三年	沖田 彩宇	おきた あやね	5
私であるための青	古川 三年	川崎 友奈	かわさき ゆうな	7
本当の自分	古川 三年	玉腰 千咲子	たまこし ちさこ	9
家族との日々	古川 三年	松原 美乃莉	まつばらみのり	11
言葉の力	古川 三年	向林 巧貴	むかいばやし こうき	13
「普通」に添える「理想」	神岡 三年	和仁 英太	わに えいた	15

【小学生部門】

大切な仲間	神岡 六年	小畑 恵樹	おほた けいじゆ	17
河合の宝	河合 六年	竹林 知菜	たけばやし ちな	19
古川祭りの伝統を受けつぐ	古川 六年	中島 樹	なかしま いつき	21
ブレない心	古川 六年	松尾 耀	まつお しょう	23
好きなことを生かそう	宮川 六年	丸山 治馬	まるやま はるま	25
笑うことのできる笑顔	古川西 六年	山口 芽生	やまぐち めい	27
幸せな僕の家	古川 六年	山崎 歩睦	やまざき あゆむ	29



令和5年度 飛騨市少年の主張大会 開催要綱

1. 趣 旨 少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。当大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 主催・共催 飛騨市青少年育成市民会議 ・ 飛騨市 ・ 飛騨市教育委員会
3. 期日・会場 令和5年6月10日（土） 9:30 ～ 12:00 神岡町公民館 大ホール
4. 部門・資格 中学生部門：市内中学校の生徒 小学生部門：市内小学校の児童
5. 発表内容 ①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど
③テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など
6. 発表要項 「5. 発表内容」①②③の中から1つを選び、5分以内で発表する。
7. 出場者の決定 各学校に作品を募集し、各校長より出場者の推薦を受け決定する。
8. 出場者 中学生部門：8名 小学生部門：7名
9. 表彰 優秀賞（出場者全員）
10. 出場者の推薦 中学生部門については、選考委員会により審査し、2名を第45回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2023～飛騨地区選考会に推薦する。
11. 選考基準 下表のような論旨、論調、総合の3区分で採点する。

区 分	No.	審査のポイント
論 旨 (内 容)	①	鋭い感性で新鮮な主張であるか
	②	新しい情報や視点があるか
	③	個人の体験にとどまらず、一般性や社会性があるか
	④	提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
	⑤	論旨が一貫し、構成がしっかりしているか
	⑥	事前に提出された原稿と大幅な内容変更がないか
論 調 (話 し 方)	⑦	主張の内容が共感と感銘を与えているか
	⑧	説得力のある話し方であるか
	⑨	話しぶりに熱意と迫力があるか
総 合 (態 度)	⑩	落ち着いて話していたか
	⑪	聞く人に強い刺激や印象を与えていたか
	⑫	発表時間が5分程度に収まっているか
12. 日 程 9:30 ～ 9:45 開会式 9:45 ～ 10:35 発表（中学生部門）
10:35 ～ 10:45 休憩 10:45 ～ 11:30 発表（小学生部門）
11:30 ～ 12:00 表彰・審査発表・指導講評・閉会



地域の伝統行事を通して考えたこと

古川中学校 三年 石原 綾心

私の住む飛騨市古川町太江には、高田神社という神社があります。高田神社の神楽獅子は、県の指定重要無形文化財に登録されているなど、古くから歴史がある神社です。

高田神社では毎年、四月二十八日に例祭が行われています。しかし、新型コロナウイルスが流行したため、三年間祭りは開催されませんでした。私は小学三年生から、鬨鶏楽をしました。祭りの一カ月前から練習し、当日は重い鉦を持ち、坂道を歩くなど、正直、面倒くさいとっていて、祭りが無いのも楽だな、と感じていました。

このような中、今年は三年ぶりに祭りが出来るようになりました。中学生になった私には、舞姫をさせていただけるチャンスがありました。祭りが面倒だと思っていた私ですが、舞姫は絶対にやりたかったのです。なぜなら、一年前に亡くなった私のおじいちゃんが望んでいたからです。おじいちゃん、は、古くからある高田神社の修復など、伝統を引き継ぐために、たくさん努力していたため、私がこの神社で舞う姿を楽しみにしていたからです。おじいちゃんに直接見せてあげることが出来ないけど、どこかで見てくれたらいいなと思います、舞姫に立候補しました。そして、選んでいただいた日から一生懸命練習をしました。大人数で行う鬨鶏楽とは違い、舞いは二人で行うことになっていたので、ただ舞うだけでなく、相手の動きを感じ、合わせること

がとても難しかったです。

私が舞ったのは、昭和十五年から始まった「浦安の舞」という舞いです、日本の古語で、「浦」は「こころ」、「安」は「安らぎ」を意味し、平和を願うために作られた神楽だそうです。

舞姫の稽古では、舞いで使用する檜扇、鉾先鈴という舞具の扱い方などはもちろん、神様の前での姿勢など、たくさんのことを教えていただきました。周りからの期待やプレッシャーで、やめたいと思うこともありましたが、三年ぶりの祭りで、またたくさんの人が私の舞いを楽しみにしてくださいましたため、最後まで一生懸命練習に取り組みました。

そして当日、とても緊張しましたが、教えていただいたことを意識し、舞い切ることが出来ました。舞いが終わったあと、地域の方たちから、「感動したよ」「とても良い舞이었다」などとたくさんの声をかけていただけ、頑張って練習して良かった、と思いました。そして何より、「絶対おじいちゃんに届いているよ」とかけていただいた声が、とても嬉しかったです。そんな声を、小学生やおじいちゃん、おばあちゃんの幅広い世代の方からかけていただきました。その時、伝統は人々を繋げる力がある、と強く感じました。「浦安の舞」に込められた願い、心の安らぎを、私の舞いを見てくださった方々が、感じていたならいい、と私は強く思います。また、神社の舞いだけではなく、他の地域の舞いや伝統にも興味を持ったので、調べてみようと思いました。もちろん、百パーセントそのままの形で引き継ぐことは難しいし、時代とともに伝統や文化は変化していくことも当然だと思います。し

かし、変化した中でも、伝統が人々に与える安心感や受け継ぐ誇りは、同じだと私は考えました。

「浦安の舞」の歴史を調べてみたところ、神社で多少の差はあるようですが、衣装や髪飾りなどが決まっていて、私が着用したのも調べたものと同じだったため、歴史ある文化を体験し、歴史の一部になれたような気がして、嬉しかったです。

少子高齢化が進んでいる今、伝統を途絶えさせないように、地域に残る文化を学び、守っていききたい、次の世代の方に繋げてほしい、と強く思いました。

最初に、高田神社をつくった人がいて、私のおじいちゃんは、それを未来に残そうとしました。私の父は、「地域の人のつながり、祭り文化を大切にしない」とよく言います。時代を経ても、世代を超え、続いていく文化や価値観は、そういうことなんだろうな、と思います。私もそんな、文化や価値観を大切に、小さなことからでも、周りに伝え、発信できる人間になりたいです。

良い町づくりのためには

神岡中学校 三年 大西 結心



私が住んでいる神岡町は古い建物が多く、子どもが面白いと思えるような施設やお店がありません。これまで私は、自分が住む町を魅力がないところだなどと思うとともに、どうにもならないというような諦めを感じていました。でも、最近、その気持ちが変わってきました。

神岡中学校では、一昨年から総合的な学習の時間に「神岡フィールド学」がはじまりました。一年生では、神岡の魅力について調べ、地元の良さや課題を見つけます。二年生になると、神岡の企業から、広告やメニュー考案などの依頼を受け、私たち中学生が企画する企業クエストという活動を行います。昨年度、企業クエストで取り組んだ依頼は大きく三つあり、私はその中の「鉱山資料館」の依頼を選びました。鉱山資料館は、昔栄えていた神岡鉱山で実際にとれた鉱石や、採掘の工程などを展示している場所です。

私は小学生のときに、授業で鉱山資料館に行ったことはありましたが、それ以来、自ら足を運ぶことはありませんでした。なぜなら、鉱石に全く興味がなく、面白くないと感じていたからです。依頼に応えるヒントを得るために、久しぶりに中に入ってみると、相変わらず静かで薄暗い部屋に、たくさん鉱石が飾ってありました。採掘の工程が書いてあるパネルは文字が小さくて読みにくく、高齢者向けではないと思いました。この鉱山資料館に率先して来る人はいるのか、疑問に思うほどです。そんな鉱山資料館を持続性が

あり、楽しく学べる施設にしたいというのが、依頼主の願いでした。

鉾山資料館の依頼を受けた仲間グループ分けし、役割を分担しました。私たちのグループは「鉾山の歴史を動画にする」ということに決めました。実際にやってみると、とても難しかったです。鉾山の歴史を調べるだけでなく、動画にする資料を探したり、その資料の著作権を確認したり、見る人が面白いと思ってもらえるようにキャラクターを設定したり、やることは山のようにありました。また、外部との連絡や調整のため、まるで会社で働いているかのように、いろいろなところに電話を掛け、知らない大人の方と会話することもありました。

そんな大変な活動の中に、楽しさを覚えるようになったのは、いつ頃からでしょうか。

動画の質を高めるために、こうしたらいい、ああしたらいいと自主的に話し合いました。みんなのアイデアが形になっていくにつれ、徐々に面白いく感じるようになっていきました。また、「鉾山資料館リニューアル検討会議」という会議に私たちも自主的に参加しました。そこでは、市役所の方と業者の方が新しい鉾山資料館のデザインについて話し合っていたのですが、鉾石に興味がない私も鉾山資料館に行ってみたくなるような魅力的な内容でした。同時に、鉾山資料館の発展のために、こんなにも真剣に取り組んでいる方々がいるのだと感動しました。鉾山資料館のリニューアルに関わることができたのが、とても嬉しかったです。

神岡フィールド学の活動は私たちがより親密に神岡の町づくりに関わる活

動だと思えます。この活動を通して、コミュニケーション力や、問題発見力、解決力を高めることができました。この力は、きっと将来にも役立つことと思えます。また、最初は授業の一環として取り組んでいただけで、次第に楽しさを見出すことができ、やりがいを感じるようになりました。

このように、良い町づくりには、行政や一部の人に任せてしまうのではなく、子どもから大人まで一緒になって考え、行動することが必要なのではなく、でしょうか。それが私たちの活動で証明されたように思えます。だからこそ、自分たちの町がずっと続いていくために、子どもたちの将来のために、この活動がもっと広まってほしいと願いながら、私は今年も取り組んでいきます。



「続ける先に」

山之村中学校 三年 沖田 彩宇

私たちの暮らしは変化にあふれています。新しいものが生まれ、古いものは消えて無くなっていきます。私は世の中が変わっていくことはよいことだと思います。でも、変わって欲しくないものもあります。それは、私のふるさと山之村ならではの暮らしです。

山之村の人口は百人程度です。その中で小中学生はたったの十五人。山之村に住む人のほとんどが高齢者です。山之村は少子高齢化がとても深刻です。保育園児はおらず、これから生まれてくる予定の子どももいません。今いる十五人がみんな大人になったら山之村の子どもは0人になります。このまま人口が減り続けるといつか山之村が無くなってしまおうのではないかと心配です。子どもがいなくなると色々なものが無くなります。まず、学校が無くなります。学校が無くなると村に活気が無くなります。伝統行事も無くなってしまいかもれません。山之村には昔から受け継がれてきた伝統行事がたくさんあります。獅子舞も神楽もその一つです。しかし、子どもがいなくなると次の世代に受け継ぐことができなくなってしまい、いずれ山之村自体も無くなってしまふ……。そんなのは絶対に嫌！私は山之村が好きです。この村に生まれてよかったと思っています。「山之村のような地域は他にもあるんじゃない？」「別に山之村だけが特別な場所ではないでしょ。」そう思う人もいるかもしれません。確かに山之村のように人口が少なく、自然に囲ま

れた所はたくさんあると思います。でも、「山之村」という地域はここにしかありません。同じ所はないんです。

「山之村を残したい。」そのために、「自分に、自分たちに何ができるのか。」を考えました。そこでたどり着いた答えが、山之村を知ってもらうために、

「山之村をPRする販売会を行う。」もっと言うならば、「山之村自体をPRし、よさを広める。」ということでした。だって、山之村がこんなによい所だと知ってもらえれば「よし、行ってみようか。」「住んでみようか。」という人が出てくるかも知れないからです。山之村のよさを知ってもらうために、

ポスターやパンフレット、動画などの作成もしました。飛騨市役所や古川の「道の駅」に赴き販売会もしました。去年は山之村のロゴシールを作り、商品に貼って売るという取組もしました。このような取組をはじめ今年で四年目です。その間に往復ハガキを使ってアンケート調査も行いました。初めの頃は、「山之村」という名前は知っていても、場所やよさを余り知らないという結果でしたが、昨年度のアンケート調査では、「場所を知っている。」

「〇〇がおいしい。」などと答えてくれた方が多かったです。またアンケートの返信ハガキも今までで一番多かったです。結果が少しずつ形となって表れてきたという実感を持つことができました。今年は、他県からのお客様が多い山之村牧場に販売ブースを設置していただき、常時いらっしゃったお客様が購入できるという新しい取組をしています。

変化し続ける世の中で、山之村の暮らしは消えずに残ってきました。それは山之村の人たちの「山之村をずっと残していきたい。守っていきたい。」

という強い思いがあったからではないでしょうか。人がいたから学校があったし、人がいたから伝統文化を次の世代に受け継ぐことができました。次に繋ぐ世代がない今が一番の踏ん張り時だと思えます。だからこそ、「今の自分たちの行動が、次に繋がる。」「今の自分たちの行動で、未来が決まる。」のだと思います。大切なのは、今のこの一瞬一瞬です。

私は、今のこの行動を「続ける先に」あるものが、未来の明るい山之村に繋がると思ひ、これからも行動を続けていきます。



私であるための青

古川中学校 三年 川崎 友奈

「え、見て。この人目が変じゃない？何かすごく怖い。」

もはや陰でコソコソと言うわけでもなく、目の前で発せられた言葉に、心臓が踏み潰されるような思いがしました。もう全て吐き出してしまいたいほどに気持ちが悪くて、何よりすごく苦しくて。じわじわと視界が真っ黒に染まっていくのを呆然と見つめていました。

そこで目が覚めたのです。中学二年生の冬、私は新型コロナウイルスにかり、一週間の自宅療養期間を過ごしていました。高熱と激しい喉の痛みを抑えて眠りについた私が見たのは、文字通り悪夢で、目覚めた時の自身の焦り様には思わず苦笑いをしてしまいました。

私は瞳の色が淡い青色をしています。青い目というのは世界で二番目に多い目の色です。そう聞くと大して珍しい訳でもないかと思えてくるのですが、日本の中で見るとわずか数パーセントだと聞いて驚きました。でも確かに今まで自分が出会った人の中で、同じように青い目を持つ人はほとんどいなかったことに気がつきました。この事実を知ると、それなりに珍しいのだと認めざるを得ないと感じます。

私は昔から、自分の目について何か言われることに苦手意識をもっていました。ですが、悪いようにいつてくる人ばかりではありません。「素敵だね」「羨ましい」と言われて少しうれしくなるときもあります。そして、中学生

にもなると、一人一人の心の成長に伴って、少し考えてから発言するようになり、無責任にこの話題に触れてくる人はいなくなっていました。何の問題も無く、いつも通りの生活を送ることができていました。そんな時、悪夢によって忘れかけていた幼い頃の記憶が鮮明に思い出されたのです。小さい子どもの素直さや遠慮の無さは、時に同じく小さかった私の心をえぐりました。

「なんでみんなと目の色が違うの？」

「変だね。気持ち悪い。」

からかい半分その言葉に、強い悪意がある訳ではないと分かっています。だからこそ、未だに夢に出てくるほどに気にしていたという事実には若干自分に対しての嫌悪感を募らせつつありました。人と目を合わせるたびに、緊張しているのがバレないように必死な自分が恥ずかしくて仕方がありませんでした。

しかし、そんな私に何でもないように救いの言葉をかけてくれた友達がいいます。その友達とは中学二年生の時に初めて話したので、一年生のときはお互いのことを全く知りませんでした。だからこそ彼女の言葉は私に衝撃を与えました。

「一年の時廊下ですれ違ってさ、めっちゃくちゃ綺麗な目しとるなって思ったことがあって。その時から仲良くなりたかったもんで、今うれしんだよね」。

友達からは、私の目は綺麗に見えていた。私の目が青かったから私に目を

向けてくれた。もっと私を知って仲良くなろうとしてくれた。彼女だけではなく、たくさんの人との関わりの始まりに私の青い瞳はあったのかもしれない。

そう思った時、気付かされました。目が青いことを誰よりも欠点として捉え、周りを気にして私らしさを押し潰そうとしていたのは他でもない、自身であると。

他人の評価を求めたり、比べたりすることは仕方のない事であり、必要なことでもあります。ですが、一番大切なのは、自分という存在をできる限り理解し、受け入れること、そして大好きでいることだと私は考えます。

「○○な自分が嫌いだ。」

自分で自分を否定してしまえば、本来のあなたもつ良さは日の光をあびることなく、枯れてしまいます。だめだと思っていた所が、他の人の視点を知り、一つの個性へと変化するかもしれません。あなたも自分らしい、好きな自分を探してみませんか。



本当の自分

古川中学校 三年 玉腰 千咲子

あなたは、周りに合わせて自分らしくすることを怖れていませんか？あなたにとって「自分らしさ」とは何ですか？私の周りには、自分らしく自分のしたいことをし、言いたいことを言って、いつも楽しそうな、今の時代で言う「陽キャ」ばかりです。私はそんな人たちと比べてみると、自分のしたい事、思っていることを素直に口にできず「どうせ私は…」とやっていつも逃げてしまいます。そのため、自分らしく振る舞うこともできず、いつも周りに合わせて、気付けばいつの間にか色々なことから目を背けていました。そして、それが自分なんだと自分で自分を諦め、周り大きな壁を作っていました。勉強もできなくて、人間関係もうまく築けなかった私には、自分からその壁を乗り越えようとしてくれる人は誰一人としていませんでした。そんな時は「なぜ私は生まれてきたのだろう。」「自分なんていなくなればいいのに。」「と自分のすべてが嫌でたまらなくなります。

そんなある日、祖母に今まで嫌で嫌でたまらなかった、おばさんみたいに古臭い「千咲子」という私の名前の由来をふと聞きました。すると「千咲子っていうのは、千咲子の生き方や生い立ちを通して周りに花を咲かせる、周りを笑顔にさせる、そんな子になってほしいって意味で付けたんだよ。」と教えてくれました。それを聞いた私は、心の中で家族がつけてくれた名前の通りに生きているだろうか…という後悔と「そんな願いを受けて今の自分は

いるんだ。よし、自分らしく生きてみよう。」という今までの自分を変えるキッカケが生まれた気がしました。また、「自分らしく生きていいんだよ。」そう言われた気がして、涙がこぼれそうになりました。しかし、今までの自分から変わる…と言っても簡単にできないのが自分です。だから何かに挑戦しようと思っても、今まで経験したことのないくらいの緊張と「自分は本当にできるのか。」という不安を感じてしまいます。ですが、自分には何ができるのか、どう行動したら人のためになるのか…といろいろ考えて動くことにしました。そうして、私は、あいさつのボランティア活動や部活動の部長など、今まで「自分には…」と諦めていたことに挑戦することにしました。するとたくさんの方が笑顔になってくれ、「ありがとうねえ。」と言われた時には、「やって良かったな」と思うことができました。その時、私の心の中は、「人を笑顔にすることがこんなに楽しいなんて初めて分かった。もっと人を笑顔にしたい！」という気持ちでいっぱいでした。

そんな時、近所のおばあちゃんが重い荷物を抱えているのを見て、「大丈夫？」と軽い気持ちで聞きました。すると「足腰が悪くてねえ。」と辛そうな声とともに、困っている様子だったので、私は勇気を出して「手伝いますよ。」と声をかけました。そうして荷物を運んでいるとおばあちゃんが一人暮らしであることを知り、寂しそうだだったので時間を見つけてはおばあちゃんの家に行くようになりました。そんなある日、そのおばあちゃんと話していると「昔は孫も一緒に暮らしていて楽しかったんだけどね。都会へ行っちゃって一人だったんだよ。でも千咲ちゃんがずっと一緒にいてくれてうれしい

よ。」と涙を流しながら笑って言うてくれました。私はおばあちゃんにずっと笑顔でいてほしいな…と思うようになり、おばあちゃんの家に行く時間を増やしていききました。そして、おばあちゃんの笑顔が増えるたびに「ああ、なんて楽しいし、うれしいんだろう。」とやりがいを感じるようになりました。そんな風に自分にできることをしていると、友達との関わりの中でも、自分の言いたいことを言うようになってきました。そして自分にとっての「自分らしさ」とは「挑戦し、人助けができる優しい自分」なんだと分かりました。この「自分らしさ」を生かして人の助けになることを自分から行ってきたいです。そして、以前の私のように周りに合わせて自分らしく生きることを怖れている人がいるならば、自分らしく笑顔で暮らしてほしい、そう心から思っています。自分らしく生きることは幸せなことだから。

自分らしく生きることは悪いことじゃない。周りと違う自分は何も悪くない。

これからも私は自分らしく生きていきたい。

家族との日々

古川中学校 三年 松原 美乃莉

私は、家族について話したいと思います。

私の家族は、五人いました。お父さんとお母さん、私、お姉ちゃん、そして妹でした。「いました」というのは、お姉ちゃんは生まれた次の日に亡くなり、妹は、予定日の少し前に亡くなってしまったからです。だから、今は三人で暮らしています。ですが、たった二人になる可能性もありました。それは、私も生まれたときには全く泣かず、無呼吸だったからです。お父さんは、生まれた私を、たった三秒間、抱っこさせてもらっただけで、集中治療室に送り出さなければならなかったそうです。お父さんは、神様にたくさんお願いをしました。その甲斐もあつたのでしょうか、私は自力で呼吸を始めることができ、一命をとりとめました。看護婦さんに、「もしかしたら後遺症が残るかもしれない」と言われましたが、「生きていてくれればいい」と気にしませんでした。私はこの通り、丈夫で元気に育っています。

そんな状況の中で生まれ、唯一生き残った一人娘なので、両親は私のことを、たくさん愛してくれるし、それ以上に叱ってくれます。

お父さんは、生まれてすぐに実の両親と離れ、見ず知らずの家庭に引き取られ、少年時代を過ごしてきたそうです。だから、「お父さん」というのは、どういう人で、どんな役目があるのかも知らないまま、私のお父さんになってしまいました。だからたまに、「ちゃんと美乃梨のお父さんになれているか



「？」と心配そうに聞いてきます。私のお父さんは、何があっても、何をしていても、私のお父さんなので、「しっかりなれているよ」と言いたいところですが、少し照れくさいので、「なれとるんじゃない？」と返してしまいません。

お父さんは、中学のころからバイトを始め、高校へは行かずに、たくさん仕事やいろいろな経験をしてきたので、みんなが知らないようなことも知っており、話していると面白いです。恋バナをしたり、夜中に二人でドライブに行ったりするくらいなので、会う人みんなに、「本当に仲が良いね」と言われます。友達にも、「美乃莉のお父さんって面白いね」と言ってもらえて、私の自慢のお父さんです。

お母さんは、「何でこんなお父さんと結婚したの」とって思うくらい、お父さんとは正反対の、真面目でしっかりした人です。そんなお母さんが、たまに私とふざけあったりするので面白いです。お母さんは、我が家を陰で支えている存在です。そんなお母さんが、五月に手術をすることになりました。富山の病院で手術をすることが決まっているので、検査や治療などで家を留守にすることが多くなりました。お母さんがいないことに慣れたように思いますが、家に帰ってきて何もせず、ダラダラ過ごしていても、「早く片付けなさい」という声がかからないと、何となく寂しさを感じてしまいます。

私は、家族三人がそろい、何気ない日常生活が送れることを、当たり前だと思っていました。特に、中学生くらいになると、勉強や部活動、休日のゲームなど、家族との時間が少なくなっていることを感じます。しかし、家に

帰ると家族がおり、おいしいご飯が用意されていること、学校での出来事を真剣に聞いてくれたり、私に向き合って支えてくれること、ダメなことはだめだと叱ってくれることなど、このような日々は当たり前ではないことに気付いたのです。家族との時間は限られています。一度過ぎてしまった時間は、戻っては来ません。だからこそ、今この瞬間を大切に生活していきたいし、日常の些細なことでもいいので、もっともっとコミュニケーションを取っていかうと思うのです。

五月十九日、私の大切なお母さんは、富山の病院で手術を受けました。約六時間にも及ぶ大きな手術でしたが、無事に成功しました。でも、いつものお母さんに戻るには、まだまだ長い時間がかかりそうです。あのお父さんと私、そしてお母さんがそろった平凡な日常が、早く元に戻るよう、心から祈っています。



言葉の力

古川中学校 三年 向林 巧貴

多くの人には好きな歌手や音楽グループがいると思いますが、皆さんはどうですか。僕にはいます。そのグループの曲は歌詞がとても素敵です。例えば、人生を一つの旅と捉えたり、聴いていても歌っていても幸せや感動を与えてくれたりするような言葉がたくさん散りばめられています。僕はこのグループの言葉に惹かれて好きになりました。このグループは顔を公表していません。それなのに、使われている言葉に惹かれてファンになってしまいました。不思議ですね。言葉には何か大きな力があると思いませんか。僕は言葉とは、思ったり考えたりしていることを相手に伝えるための「道具」だと思っています。

自分の周りで嫌な言葉、マイナスな言葉ばかり言う人がいると気分が晴れない感じがしませんか。それは自分が言われたわけではなくても、そういう言葉をたくさん浴びているからではないかと思えます。二つの同じ植物に二種類の言葉をかける実験があります。「綺麗だね」「大きくなってね」などのいい言葉と「いても意味がない」「きもい」などの嫌な言葉です。それぞれ言い聞かせ、成長を比べると、前者は大きく育ち、後者は葉っぱが垂れ下がりが、枯れ果ててしまったそうです。このことから、言葉には大きな力があるということがよく分かります。

言葉とひとことに言っても星の数ほどありますし、組み合わせ次第でその

意味は無限に広がっていきます。その中でも僕は「ありがとう」という言葉を大切にしています。「ありがとう」には言葉の中でも別格の、人をいい気持ちにさせる力があると思いませんか。そして何より、僕自身が家族や友だちに「ありがとう」と言われるととても嬉しい気持ちになるのです。たった五文字のこの言葉、言われるだけで気分がいい。「また『ありがとう』と言われたい。」という気持ちになってしまふのは僕だけではないはずです。

以前、こんなことがありました。部活の後輩がすすんで準備や片付けを手伝ってくれたのです。僕が「ありがとう！助かったよ！」と声をかけると、恥ずかしそうににっこりと微笑んでくれたのです。なぜかそのとき僕はすごく嬉しくなりました。このとき始めて、自分の言った「ありがとう」で自分も幸せな気持ちになれるということに気付きました。その後も、その後輩たちはすすんで作業を手伝ってくれます。そしてそれを見た他の子たちも動くようになってきました。「ありがとう」という言葉がもつ力は、誰かの心を動かすのです。

そんな僕が日々実践していることがあります。モノを買うときに「ありがとう」と必ず伝えることです。最近自然にも出てきます。モノを買って自分の手に渡るまでには、たくさんの方が関わっています。だからこそ、その感謝の気持ちを伝えたい。利用する側の言葉一つが、お店の人のやりがいやモチベーションに繋がっていると信じて、僕はこの言葉を一番大切にしています。僕の口にする「ありがとう」は小さな力にしかならないかもしれませんが、誰かがそれで嬉しくなったら僕も嬉しいのです。

日本中、世界中の人々が「ありがとう」という言葉をもっと口に出して言うようになったら、幸せの輪が広がります。そうなれば、「人生が楽しくない」「自分が嫌い」などと言ってしまう人が減っていくと思います。最近日本ではじめの話や中高生の自殺の話題が絶えません。プラスな良い言葉を常に言っていれば相手や自分の否定する必要がなくなり、悲しい出来事は減っていくと思いませんか。言葉とは、道具だからこそ使い方が大事で、使い次第で利器にも鈍器にもなり得ます。そして、利器として使ってこそ大きな力を発揮できます。僕たち一人ひとりが発する「言葉」には、たくさんの人を嬉しい気持ちにしたり幸せにしたりする力があるのです。



「普通」に添える「理想」

神岡中学校 三年 和仁 英太

「普通」という言葉が、僕は嫌いです。多くの人が何気なく口にする「普通」という言葉。僕はその言葉に、もどかしい嫌悪感を抱いています。

嫌悪感の始まりは、小学四年生の頃。当時の僕は、友達との楽しい毎日を過ごしていました。毎日が明るく始まり、一日を振り返りながら笑顔で家に帰っていました。

そんなある日、同じ班の皆と給食を食べていると、僕の前に座る女子が不意に言いました。「和仁君ってさ、前歯出ているよね？歯って普通はきれいに生えてくるんじゃないの？」僕は答えに困りました。確かに自分が出っ歯だという事には気づいていました。でも、その事で悩むことはありませんでした。常に前歯が出ている自分が当たり前だったからです。その時は「わかんない。」と誤魔化すしかなかったのを覚えています。

それ以来僕は、「自分の歯が周りにどうみられているのか。」ということ、常に気にして生活していました。再び、自分の歯が出ていることを指摘されるのが不安で仕方がなかったからです。でも、その不安以上に、僕が違和感を抱いたのは、普通が正統であり、自分の歯が、普通から逸脱していると否定されたように思ってしまったことです。「何が普通で何が普通でないのか。」「なぜ普通と比較されるのか。」常に「普通」への疑問が頭から消えませんでした。

僕が小学五年生の頃、新型コロナウイルスの魔の手が襲ってきました。それまでの生活は一変して、対面での給食は無くなり、常にマスクを着用しなければならず、みんな窮屈な思いをしていました。しかし僕は、少し安心していました。自分の歯をマスクで隠すことができ、密やかな安堵感を得られたからです。見せかけの普通を手にして、心から安心したことを覚えています。このままマスク生活が続けばいいなとさえ思いました。

そして小学六年生の春、母から歯の矯正治療を勧められました。僕は心底から喜びました。自分の歯を普通に近づけられると思ったからです。それから、二年半の矯正治療のおかげで、自分の歯は普通になりました。でも、自分の願いが実現して嬉しい反面、何か虚しさがありました。「歯並びがよいのが普通なのか？」と四年生の頃からの疑問がぬぐえないままだったからです。

そんなある日、町中でこんな人を見かけました。両足の付け根から下がなく、母親らしき人に車椅子を押してもらっている、若い男性の方です。その親子はとても笑顔で町を散策していました。ですが、その時僕は、ふと「普通なら両足で歩いて観光できたんだろうな。」と勝手にしまいました。あれほど疑問を抱いていた言葉が、無意識に浮かんだのです。その瞬間、ハッと我に帰って「普通」という言葉に籠る意味に気づきました。「普通」には、「そうであってほしい」という「理想」が無意識の内に込められているのだと。僕が車椅子の方に「普通」という言葉を選んできたのは、軽蔑ではなく、同情でもなく、その人が両足で歩ける姿をイメージして、彼への勝手

な理想を普通という言葉で表現した結果なのだと思います。

でも、この理想は個人の偏見や主観でしかありません。僕は体を動かすことが好きなので、車椅子の彼に「両足が使えたらいいな。」という理想を抱きました。でも彼は、車椅子から見ると景色が好きであるかもしれません。本人の意志を考えずに自分の勝手な理想を口走ってしまう事は、無意識のうちに差別や誹謗中傷につながる可能性があります。

近年、世界ではLGBTQや人種差別など多くの人権問題が発生しています。ニュースでそんな話題を見るたびに、同じ人間として悲しさを感じます。自分らしい生き方を否定されている人を、一人でも減らすためには、「普通」という言葉に自己都合な「理想」を込めていないか考えて発言する必要があります。

僕は、「普通」に添える「理想」を考えて生活していくことで、これから出会う多くの人の個性を尊重していきたいと思えます。



大切な仲間

神岡小学校 六年 小畑 恵樹

みなさんには、仲間がいますか。ある時は競い合ったり、ある時はけんかしたり、ある時は協力したり、またけんかしたり。そしてまたある時には支えあったりと、いろいろな仲間との思い出があると思います。仲間は、みなさんにとっても、かけがえのない存在ではないでしょうか。

ぼくには、いろいろなきっかけでできた仲間がたくさんいます。図書館へ行って、本をたくさん借りると同じしゅみがきっかけでできた仲間であったり、「けんかするほど仲がいい」というように、けんかしているうちに仲良くなった仲間であったり、一緒に遊んでいるうちにできた仲間であったりと、いろいろなきっかけで仲間が増えました。

ぼくはもともと、北海道に住んでいました。神岡町に引っこすことを知った時、新しい所で、どんな人に会えるかという楽しみもありましたが、仲間とはなれることの悲しみもありました。みなさんも、もし仲間とはなれなければならなくなったら、きつと悲しみの気持ちがわくでしょう。悲しみがわくということは、仲間を大切に思っているということだとぼくは思います。

今、世界では戦争や差別が起きています。住んでいる国がちがったり、肌の色がちがったりしていても、みな地球に住んでいる、同じ人類です。それに、戦争や差別は人をきざつつけたり、苦しめたりすることです。良いことは一つもありません。たくさんの方がなくなり、たくさんのおみだが流れます

。ぼくにも仲間を失った経験があります。それはとつぜんのことでした。言葉で表せないほどの悲しみの気持ちがわきました。大切な仲間を失ったショックはとても大きいものでした。その大切な命を失ってしまう戦争や、大切な心をきずつけられる差別が今、この世界で起きています。

大切な命が失われるこの状況を何とかしたいと思っても、自分はまだ小学生。「失敗ばかりですぐ落ち込んでしまう自分に何ができるのか」と不安やあきらめの気持ちがありました。でもその時、失った大切な仲間の姿が頭にかかびました。「みんなが仲良くなってほしい」と願い、みんなが仲良くなるように、自分から積極的に行動していた姿。その姿を思い出して、はっとしました。たしかに、今すぐ大きなことを起こして、戦争や差別をやめさせることは無理かもしれません。でも、「小さなことでも今の自分にやれることを続けていけば、少しでも状況を変えられるかもしれない。」そう思えました。だからぼくは今、相手の気持ちを考えて行動することを心がけ、生活することを続けている所です。

みなさんは、今、仲間を大切にできていますか。いつまでその仲間といっしょに学校や社会で生活していけるかは、分かりません。とつぜんの別れがやってくるかもしれません。だからこそ、今、仲間といっしょに生活できる時間を大切にし、関わっていききたいと思います。

今ぼくは、友達と好きなキャラクターや学校のことを話す時間。本の貸し出し冊数を競い合って、「すごいなく。」と高め合う時間。笑い合いながら、

仲良くカードゲームなどで遊ぶ時間が、かけがえのない楽しい時間です。

これからの世界、だれもが周りの人を同じ人類として大切にし、みんなが仲良く幸せに暮らせる世界になればいいなと思います。みなさんも周りにいる人を大切にし、これからも生活していきましょう。そうすることで、一人一人が周りを大切にできる社会へ近づいていくと思います。みなさんもそう思いませんか。

河合の宝

河合小学校 六年 竹林 知菜



「卒業証書 右は、小学校の課程を卒業したことを証する」

河合小学校の卒業証書です。河合町で800年以上も前から作られている伝統工芸品「山中和紙」で作られています。私たち一人一人が、自分の手で作ります。「高学年になるにつれ忙しくなったふるさと大運動会」・「河合っ子座公演」「友だちとの思い出」など、頑張った6年間を思い出し、6年間の思いを込めて作ることができます。だからこそ、卒業式でもらった時に「やりきった!」という達成感を感じることができるのです。また、山中和紙には、「破れにくい」というよさもあり、大切な卒業証書を長く保管することもできます。

みなさんは、この山中和紙について知っていますか？

私がこの山中和紙に初めて出会ったのは、6歳の時です。保育園の卒園証書がこの山中和紙で作られていました。そして、河合小学校へ入学し、3年生の時に、初めて和紙づくりを体験しました。

山中和紙を作るには、一年かかります。春や夏は材料となる楮を植え、その手入れをします。秋は楮を収穫し黒皮をむき、冬は「雪ざらし」という楮を白くする作業をします。乾燥させた後は、なたで細かく切断し、煮ます。さらに、2回目の雪ざらしをしてから、冷たい水に浸しながら細かいごみやよごれを一つ一つ、手で取り除きます。それを機械に入れ、手でかき混ぜな

がらたたき、楮の繊維を柔らかくします。その後、紙漉きの作業に入ります。漉いた後は、一枚一枚丁寧に乾かして、ようやく山中和紙ができるのです。

実際に私は、3・4年生の時に、柏木一枝さんという名人に習いながら、楮の皮剥きや雪ざらし、紙漉きをし、一枚の山中和紙を作りました。工程が多く、一人でやるのは本当に大変です。その時の柏木さんのお話から、「破れにくく、水に強い」という「山中和紙のよさ」も初めて知りました。実際に水につけても破れなかった和紙を見て、「すごい！」と思いました。

4年生になって、もう一度山中和紙づくりを体験したときも、あらためて「やっぱり山中和紙はすごい！」と思いました。そして、さらに興味がわいてきました。体験後、山中和紙について調べていく中で、この山中和紙を作っている家が2軒しかないことに気付きました。「山中和紙の卒業証書が作れなくなる」と考えると、なんだか悲しくなりました。私は、「河合小学校を卒業する、みんながこの山中和紙の卒業証書をもらってほしい。なくなるとほしくない！」と思いました。

インターネットで調べると、現在長尾農園の長尾隆司さんは、「800年続くこの伝統を残したい」という思いで山中和紙を作っていると書いてありました。和紙の原料である楮植えから始まり、寒い中での雪ざらしやゴミを取り除く「チリより」等の作業を全て自分の手でやっているそうです。実際にお話をお伺いすると、「昔から河合町にある大切な物です。残していつてほしい。」とおっしゃいました。なくなる可能性はあるけれど、こうやって

残そうとしてみてくださいる方がいる。このことがわかって、安心しました。

私にできることは、この『河合の宝』である「山中和紙のよさ」を、河合小学校のみんなに知ってもらうことです。そして、「私たちの卒業証書は世界に一つしかない私たちの宝なので、これからもずっと残していきたい」という思いをもってもらうことです。今年も河合小学校の3・4年生は、山中和紙づくり体験をします。私のこの思いは、河合小学校の全員に伝えたので、『河合の宝』である山中和紙で作った卒業証書で、「卒業できるうれしさ」をみんなに感じてほしいと思っています。



古川祭りの伝統を受けつぐ

古川小学校 六年 中島 樹

毎年四月十九日、二十日に古川祭りが行われます。古くから伝わり、地域でとても大切にされています。ぼくは、古川祭りをとても誇りに思っています。

ぼくの住んでいる三之町には、屋台があります。屋台の名前は、清曜台。古川祭りでは地域の子どもが屋台に乗っておはやしをやり、町を回ります。ぼくは、今年の古川祭りで、初めて笛をふきました。去年もおはやしに参加したけど、今年の出番が多かったです。でも、おはやしをやる人数は、ぼくの町内で、小学生、中学生と合わせて四人しかいません。その中でも、男の子はぼく一人だけです。今年は、高校生や他の町内の小学生や中学生と一緒にやってくれました。このままでは、おはやしをやる人がどんどん少なくなっていくます。ぼくは、おはやしをやる人が少ないのは大変だと思いました。

今年の祭りで笛をやること決まった時、お父さんに、「みんなをひっぱっていくんだよ。」

と言われました。ぼくは、「ひっぱるって、どうやったらいいんだろう。できるかな。」と、少し不安に思いました。でも、「がんばって、みんなをひっぱっていかないと。」と心に決めて取り組みました。

そのためにぼくは、町内での練習が始まる一か月前から、笛の練習を始め

ました。家でおじいちゃんやお母さんに教えてもらったり動画を見たりしながら練習しました。最初は指の動きを覚えることや音を出すことに苦労しました。毎日何度もくり返して練習し、何度も失敗しました。高校生のお兄さんの笛の指の動きも見ながらやりました。みんなをひっぱることは、まずは自分がせいっぱい取り組むことだと思い、一生懸命練習しました。だんだんうまくなっていくのは、うれしいものでした。本番では、笛をうまくふくことができました。「練習の成果が出たな。」「少しでもみんなをひっぱっていくことができたな。」と、とてもほっとしました。「もっとうまくなりたい。」と思ったので、また来年も挑戦したいです。

祭りが始まる前、おじいちゃんがこんなことを言っていました。

「人が少なくなって古川祭りの伝統を簡単にしていくことは仕方がない。でも、これまででつないできたことを傳承していくことはとても大切なこと。だから、自分が元気なうちは、できることをやっていきたい。」

その時ぼくは、「このままだとせつかく昔の人からつないできた伝統がなくなっていくかもしれない。人が少ないという理由だけであきらめないで、できる人はどんどん祭りに参加してほしいし、ぼくも次の人へと伝えていきたい。」と思いました。

おはやしをやる人、古川祭りの伝統を受けついでいく人は、少なくなっています。人がいない、人が少ないという理由だけで、古川祭りの伝統がうすれていく、簡単になっていくことは、さみしいしもったいないと思います。地域の人みんなでがんばって協力して、次の人へとつないでいてほしいです。

。ぼくが今できることは、一生懸命おはよしの笛をふいて、ひっぱっていくことがと思います。おじいちゃんやお母さんがよくに笛を教えてくださいました。ぼくも妹や下の学年の子に教えていきたいです。おじいちゃんは、飛騨市で古川祭りの本を作ることに関わっています。その本ができたら読んでみたいです。おじいちゃんに古川祭りの歴史を聞いたり、自分でも調べたりして、大事だと思ったことなどをいろんな人に教えたいです。「今までずっとそうだったんだよ。続けられてきたんだよ。」と、伝統を受けつぐ心を大切にしていきたいです。



ブレない心

古川小学校 六年 松尾 耀

みなさんは、小さな頃から大好きなことでブレずに、突き通してきたものがありますか。僕は小さい頃に好きになって以来、ずっとブレずにいるものがあります。しかし、今までにそれがブレて、消えてしまいそうになったことがありました。

僕が小さいころからずっと大好きなもの。それはカエルです。ある日、学校で自分の好きな生き物を紹介する場面がありました。その時、まわりのほとんども「ええー！」とおどろきました。また、校庭で見つけたカエルをみんなに見せた時には、「うえう。」「気持ち悪い」などと言われました。その日から僕は、「カエルが好きなものって、おかしいのかな。」と疑問を抱くようになり、カエルが大好きなのに、それをあまり言わなくなりました。

別にカエルを嫌いな人がいても、僕は別に良かったのです。確かに、个性的な見た目をしているし、触ると指がねばねばするとくちようももつています。嫌いな人がいることも仕方ないことでしょう。でも、だからといってカエルが大好きだという僕の前で、「気持ち悪い。」「カエルなんて大嫌い。」と大きな声で言う必要はあるのでしょうか。カエルの悪口を言うのと同時に、自分のことも否定されているようで、僕はとても悲しい気持ちになりました。そんな人が周りにたくさんいるので、僕のカエル好きとしての心は、もう

ブレて消えてしまいそうになりました。

ある日、どうして自分がカエルを好きになったかを思い返しました。僕が、初めてカエルと出会ったのは、おじいちゃんに田んぼに連れて行ってもらったときです。その時に見たカエルの姿があまりにも可愛いくて、一目ぼれをしてしまいました。それからカエルに興味をもった僕は、凶鑑などでカエルのことを調べるようになりました。カエルは、高くジャンプができて、泳ぎが得意で、飛んでいる虫を捕まえることもでき、さらには周りの景色にとけこむことができる！自分にはできっこないことを当たり前のようにやってみせるカエルに憧れの感情を抱くようになりました。それからというもの、僕はカエルが大好きで、大好きでたまらなくなりました。僕は考えました。小さな頃からこんなに大好きなカエルを、周りから否定されただけで、諦めてしまったてよいのか、ブレてしまったてよいのか、と。いや、ダメに決まっている！僕はカエルが大好きなんだ！堂々と好きと言えればいいじゃないか！でも、そんな考えとは裏腹に、カエルを好きと言ったときのみんなの反応が怖くもありました。また前みたいに、おどろかれたり、カエルの悪口を言われたりしたらどうしようと、とても不安でした。

しばらくたったある日、僕は勇気を出して、久しぶりにみんなの前でカエルが好きだと言いました。すると、いつものような「ええ〜」「気持ち悪い。」という声が聞こえてきて、僕は「やっぱりみんなカエルがきらいなんだ。「カエルを好きなことは変なことなんだ。」と暗い気持ちになりました。しかしその時、多くの否定的な声に交じって、「僕も好きだよ！」と言う声が

聞こえてきたのです。その時、僕は「自分以外にもカエルが好きな人がいるんだ。」ということが分かりました。安心とも喜びともいえるなんとも言い難い明るい感情に包まれました。たくさんの人に否定的な言葉をかけられても、同じようにカエルのことを好きな仲間がいる。そう思うと、不思議と自分の気持ちに自信をもてるようになりました。また、カエルが嫌いだと言う人のこともあまり気にしなくなりました。

今でも思うことがあります。もしあの時、同じカエル好きの仲間を見つけない、今の僕の生活はこれほど楽しくなかったのではないかと思います。

この話を通してみなさんにつたえたかったことは、自分の好きなことは何があってもブレずに突き通してほしいということです。「自分が変なのかも」と思うこともあるかもしれませんが、きつとあなたと同じものを好きな仲間はどこかにいるはずですよ。自分が好きなものに自信をもち、大切に大切に突き通して行ってください。



好きなことを生かそう

宮川小学校 六年 丸山 治馬

皆さんには、時間を忘れるくらい好きなことはありますか？ぼくは、折り紙が大好きです。作っていると何時間も折り続けるくらい好きです。保育園の時に、折り紙でバラを作ったのがおもしろくて、家でも何回も折りました。ちようどそのころに、折り紙で作ったキョウリユウが表紙になっている本を見つけました。その本にのっている作品を作った時から、本格的に折り紙を始めました。

ぼくが折り紙の作品を折る時に、気をつけていることがあります。それは、一つ一つ丁寧に折り筋をつけてから折り始めることです。雑に折ると自分もがっかりするし、それをだれかにわたすことになったら、もらった人もがっかりするからです。正確な正方形になっていない折り紙があったら、作る前にカッターで切って整えてから作り始めます。これまでで一番時間をかけて作った作品は、キョウリユウの骨格標本です。四十五枚の折り紙を使って、一週間かけて作りました。

作品を作っていて楽しいのは、作り始めと作り終わった瞬間です。作り始めたときは、「かつこよくなる」といいな」という思いで、わくわくしながら作ります。作り終わったときは、達成感でいっぱいになります。この達成感をもっと味わいたいと思って、折り紙の作品を作り続けています。また、本にのっている折り方ではなく、自分で新しい作品を考えることもあります。

例えば、「花づる」です。これは、ふつうの折りづるの背中が花びらみたい
に開いているつるです。他にも、自分で考えた折り方が十種類くらいありま
す。どれも苦勞して考えるので、出来上がると、さらに達成感があります。

ぼくは、こうして作った作品を、たくさんの人に見せて喜んでほしいと思
いました。

そこでぼくは、一年生をむかえる会で、一年生に、ぼくが作ったウサギや
しば犬の折り紙をプレゼントしました。一年生が「すごい。」とうれしそ
うに言ったり「なんで作れるの。」と不思議そうに言ったりしていました。先
生方へも折り紙のキョウリュウやペリカンをあげました。そのときも、「す
ごい。」と感心されました。折り紙で相手の心を動かすことができたのです。
その時はうれしかったし、折り紙ってすごいなと思いました。

さらにぼくは、自分が作った作品を地域の方にも見てもらえるように、宮
川診療所に作品を置かせてもらいました。作品を見た感想を書いてもらえる
ように、用紙も置いてきました。すると「病院に来て元気をもらいました。」
とか、「細かく折れていて本当にすごい。」など、たくさん感想をもらいま
した。ぼくは、作品を見た人に元気になってほしいと思っていたので、その
思いが伝わったかなと思いました。また、たくさんの方が丁寧に感想を書い
てくださっていたので、苦勞して作った作品を大事に思ってくれたんだと、
うれしくなりました。作ってよかったな、と思いました。

また、作品を置きに行った時、診療所にいたおじさんやおばあさんと、折
り紙について話をしました。ぼくの折り紙を喜んで、とても明るく元気に話

してくださったので、ぼくも元気になりました。こうやって、折り紙を通じ
て地域の人と話をするのができたこともうれしかったです。

ぼくは、また夏休みに折り紙の作品を作って、展示したいと思っています。

例えば観光客も見ることができるようになるようにまんが王国に置いたり、宮川町以外
でも見られるように図書館などに置いたりしたいです。そして、展示を見た
人に喜んでほしいです。

ぼくは、折り紙を折ることが大好きです。そして、折り紙を通して周りの
人に働きかけ、楽しませることができたこともうれしいです。皆さんも、何
か好きなものを見つけてみませんか。見つかったらそれを生かして、人を喜
ばせるために、何か働きかけてみませんか。そうすれば自分も相手もいい気
持ちになりますよ。



笑うことでできる笑顔

古川西小学校 六年 山口 芽生

私は、「どっちでもいい」が口ぐせです。本当にどっちでもいいというわけではないけど、「どっちでもいい」と言ってしまうのです。考えるのがめんどくさいのもそうですが、本当は決めるのが怖いのです。

昔、友達に「どっちがやりたい？」と聞かれたことがあります。その時、私は「こっちがいい」と言いました。その後、友達とけんかになってしまいました。私が、「こうだから、こうなるんじゃない？」と言うと、友達は、「それは、こうだからこうであって・・・。」と言い返してきて、このようなやり取りが続きました。けんかが終わってしばらくすると、私は、自分の意見を主張したから、けんかが起こったと後悔しました。その日から、「どっちでもいい」と言うようになってしまいました。

その出来事があってから、思っていることが言えず、私は楽しくても作り笑いをするようになっていきました。そのことに初めて気付かされたのが、友達から、「芽生さんって作り笑いをよくするよね。」と言われたことでした。思い返すと、心当たりはたくさんありました。例えば、友達と冗談を言い合っている時に、みんなは笑っているのに、私だけ笑っていなかったり、笑っていてもすぐに真顔に戻っていたりすることがありました。

でも、テレビなどで好きな番組を見た時は、心から長く笑って楽しいな、面白いなと思うことができます。それなのに、友達と話す時は、楽しいはず

なのに顔が笑っていないのです。別に友達の話がつまらないわけではありません。私は、「なぜなのだろう」と悲しくなりました。楽しいのに笑えない自分に気づいた時、不安が広がりました。本当に楽しく笑える時の気持ちで、どうやって出てくるのだろうかと思うようになりました。

そんなある日、私が作り笑いではなく、本当に楽しく笑えたことがありました。その出来事とは、何人かの友達と話している時、ある友達が私に、「こつちとこつち、どつちがいい？」と聞いてきた時でした。私はその時、やっぱりちゃんと答えた方がいいと思いました。勇気をふりしぼって、「こつちかな」と答えました。また、けんかになるかなと不安になり、やっぱり言わなきゃよかったとも思いました。でも、その時です。周りの友達の「確かに！」「そうだよね！」と、明るい声で反応する姿が目に入ったのです。私は、友達と気持ちが通じ合ったようで、自然に笑顔になりました。勇気を出して言うてよかったと思いました。ちょっとしたことだけど、とても楽しく感じました。

このことから、思ったことを言うことは、悪いことばかりではないと思うようになりました。その日から少しずつ思っていることが言えて、作り笑いではなく、心から楽しく笑うことができるようになりました。

今、私は、笑うためには思っていることを言うことが大切だと感じています。私は今まで、「どつちでもいい」をたくさん言って、無理にでも自分の気持ちを押し込めていました。今思うと、私はどつちでもいいと言って意見を友達にゆずっていると思っていたけど、それは友達に対する優しさではな

く、「あなたが決めて」と無理やり押し付けていたのだと気付きました。友達に、本当に申し訳ないことをしたなと思っっています。今でもまだ、はっきり判断することは怖いです。でも、いつまでも後悔する自分でいたくありません。これからは、「どつちでもいい」で済まさないようにしたいです。そして、ちゃんと自分で判断し、意見を言うことができるように頑張りたいです。無理して笑わない自分を目指して、心から楽しんで笑える自分を目指して、素直な気持ちを表現し、本当の笑顔を作っていきたいです。



幸せな僕の家

古川小学校 六年 山崎 歩睦

僕は家が大好きです。みなさんはどうですか。毎日暮らしていると、家のことをあまり考えたことがないかもしれません。でも家は素晴らしい場所です。今日は、僕の家の素晴らしさについて説明します。

まず僕の家での普通の一日について話します。お母さんの「起きて！」という声から一日が始まります。僕は布団の中に一度もぐり、いやいや起きます。一階に降りてトイレに行き、そのあとリビングで朝ごはんのパンを食べます。リビングで着替えて、学校へ行く準備をします。ドアを開けながら「行ってきます！」という、お母さんが「行ってらっしゃい」と言ってくれます。

学校から帰ってきました。荷物を降ろしたら、まずソファに座って休めます。そして洗濯物をたたみます。ふろそうじはお姉ちゃんと交代でやります。リビングの机で勉強をして、五時になったら早炊きでご飯を炊きます。お風呂がわきました。僕が先にお風呂に入ります。お風呂の後は夕ご飯です。ご飯を食べたら少しゲームをして、二階の僕の部屋のベッドで寝ます。今話したような普通の暮らしにも、家の素晴らしさがたくさんあります。

一つ目は、家は僕が休める場所だということです。僕は疲れて帰ってきたら、まずソファに座ります。やわらかくて、とても気持ちがいいです。ソファからはテレビが見えます。アニメがとてもおもしろいです。サッカー

の練習から帰ってきたら、すごく疲れているので、必ずソファーに横になって休みます。ときどきお姉ちゃんが先に座っています。「どいて。」と言うと、お姉ちゃんが足を曲げてくれるので、そのすきまに僕が座ります。もっと広く使いたいなあ、と思うけど、ちょっとどいてくれるから、ありがたいです。

二つ目は、家はあつたまることのできる場所だということです。家のお風呂は、洗面所の横にあります。僕はシャワーで頭から洗います。体を洗い終わったら、湯船につかります。湯船につかるととてもあつたまります。疲れているときは、浴槽に入ったまま、お風呂のふたを完全に閉めてしまいます。そうすると薄暗くて、すごくリラックスできます。小さい頃は兄弟と入っていました。今は一人で入っています。一人で入ると広くて、もっとリラックスできます。あつたまる物はもう一つあります。それはベッドです。僕のベッドは二段ベッドで、お姉ちゃんが上で、僕が下で寝ています。冬に毛布にもぐると、ふわふわでとても気持ちよくて、体があつたまります。僕はゆっくりリラックスして眠ることができます。

最後に、家は楽しい場所だということです。僕の家族は、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、僕の五人家族です。リビングには木でできた大きな机があります。いつもそこでご飯を食べながら、その日あったことを話します。学校で、友達と話したこと。休み時間に友達と遊んだこと。学校で勉強した内容は、特に必要ないので話しません。最近の話題で覚えているのは、給食がから揚げだった日に、夕食もから揚げだったという事件です。

僕が「一緒なの？」と言ったら、みんなが笑っていました。連続のから揚げ

はおいしかったです。

このように、家は素晴らしい場所です。僕は家で過ごしていると、とても幸せに感じます。でもそれは、休める物、あつたまる物、楽しい物があるからだけではありません。そこに家族がいることで、安心してもっと休めたり、心もあつたまったり、みんなと楽しめたりすることができなのです。

だから、僕はこれからもこのような幸せな暮らしをするために、休む時間、一人でお風呂に入る時間、家族との時間を大切にしていきたいです。

みなさんも、自分の家での過ごし方を振り返ってみてください。そうすれば、家が自分に何をしてきているのかに気づき、自分が幸せだと感じられると思います。今よりもっと、家で過ごしている幸せな時間を大切にしてみませんか。

令和5年度
飛騨市少年の主張大会
～ 発表記録集 ～

作成：飛騨市青少年育成市民会議
